

伊奈上宿の山車

郷土館だより

第39号

五日市町立

発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425-96-4069

かみじゆく だし 伊奈上宿の山車

五日市町文化財保護審議会委員

溝口重郎



岩定神社例大祭(9月14~15日)における伊奈上宿(本町)の山車
1987.9.15 中村清作氏撮影

はじめに

祭礼は一年間の五穀豊饒と人々の生活の安泰を素朴な気持ちで神に祈ったものと言われています。

「チャヒーヤ、ピ」という笛の音と共に「テンスケテンテンテンテン」という祭囃子旋律に、思わず心が踊らされ、わくわくした嬉しいような思いを抱いて育った人はたくさんいると思います。

またその祭囃子を囃す山車も江戸時代以来の形態の流れを汲む大規模な本格的な「山車」と、自動車の荷台に積んで地区をくまなく動き回ることの出来る簡便な「車山車」があり、五日市近郊では後者が近年増えてきつつあります。

山車については、学術的には「曳山^{ひきやま}」とか単に「山」とも称されています。さらに関東地方では「屋台^{やたい}」と呼称している地域もあります。

曳山の起源については、古くは平安時代の貞観11年(869)に京都の祇園祭に曳き出された鉾まで溯ると言われております。

曳山に大きな影響を与えたと推定されるものに「標山^{しめやま}」というものがあります。標山とは、『続日本後記』という本の中に、天長10年(833)国司が宮中の大嘗会に列した時、その目印として立てた標柱の事で、その標柱の上に鳳、梧桐、五色雲等を飾りました。これは神の宿る拠り所として民俗学的に重要な意味を持っています。

特に江戸時代以降の山車については、この標山の遺構を残しながらも、彫刻等の装飾や囃子等の芸能が結び付いて、構造にも独自の改良が加えられて完成され、形式化されていったと考えられます。

今回は特にこの本格的な山車と考えられます伊奈上宿の山車について考察してみたいと思います。

1. 山車の購入経過

伊奈上宿で所有している山車については、現在の八王子市八木町から購入されたものです。

山車の購入に中心的中にかかわった人は故山本大三郎と言いました。この方は通称「だいさん」と呼ばれ、商才^{とくらや}に富み、五日市町の利倉屋の大番頭をしていた方です。

利倉屋は主に荒物雑貨を手広く商っておりまして。「だいさん」は晩年までこの利倉屋に勤めており、常に出張して、自宅にゆっくり休むようなことは一ヶ月に一度位であったと言われていました。

「だいさん」は伊奈の宮沢坂を登り、扇町屋街道の起点となる場所に居を定めました。当時は福生方面からやって来る馬方や農閑期に炭を五日市町まで買い付けにやって来る農民等の往来も多く、自宅で荒物雑貨商を妻ナミに営ませていました。

山車の購入年代に関しては、諸説あって現在はっきりした確証が得られておりませんが、それらを掲げてみますと下記の様になります。

- ①伊奈上宿松村秀樹氏は、故河野傳吉（明治42年生まれ、平成2年没、囃子には若いころから亡くなる一年前まで熱心に取り組んだ方である。）が尋常高等小学校4年生の時に、嬉しくて山車を戸吹まで迎えに行き、引いて来たと言っていたとのことである。年代を逆算すると、大正7年4月から大正8年3月の間のことと推定される。
- ②野崎高吉氏によれば、ちょうど高吉氏が1才の時、山車が来たということをお父太蔵から聞いたとのこと、年代的には、大正11年と推定される。
- ③鈴木ナカ氏（明治40年生まれ）は「私が高等科を卒業した（大正11年3月）ちょうどその後だったと記憶しております。」

このように購入年代は現時点では今一つはっきりしませんが、例大祭が近づいた頃、「だいさん」は八王子八木町で山車の売り物があるという情報を聞いて、八王子に出向き、すぐに100円で購入契約をし、上宿に帰って来てから地区の有力者に山車の購入に関する話をしたとのこと。

「だいさん」は体格は小柄であったが、太っ腹の性格で、村の方達から了解が得られない時には、個人的に寄付をしてもよいと考えていたとも語り伝えられています。しかし有志の清水理八、畑野伝吉、坂本宗竹（共に故人）などが積極的に盛り立てて、上宿全戸で購入していこうということになりました。

寄付については、予定していた様にはなかなか集まらなかったと思われ、間部照雄氏は「故間部久治郎から聞いた話では、寄付を集めたところなかなか集まらなくて、「山本のだいさん」が一時100円を立て替えたとの事ですよ。」と語ってくれました。

山車の引き取りの当日は、上宿全ての家から人足を出

して、八木町まで出向き山車を引いて来たと言われている。ただし購入した時点では、山車の輪には輪金が入っておらず、松村重蔵氏は「父の三吉は、戸吹まで山車を引いて来ましたが、だめになってしまうというので、棒屋で輪金を入れてから伊奈まで山車を引いて来ました。」と語っていたとのこと。この件では野崎高吉氏は八王子の「棒兼」という方が輪金を入れたと聞いているとのこと。

山車のシンボルとしていた人形は製作すると高価であり、「天穂日命」は譲ってはいいただけませんでした。

時代的にはちょうど五日市は電柱が道路沿いに設立されてくる時期と一緒にするために、一本柱に人形をつけて山車の上に掲げることは支障がでてくる時代であったとも考えられますから、あまり人形を乗せるの必要性を感じていなかったかも知れません。

それにしても運の悪いことには、今次の太平洋戦争に際して、八王子では大火のために、この人形が焼失してしまったことは、誠に残念なことであったと思われます。

鈴木ナカ氏の語るところによると「昔のことですが、上宿の各家にお祭りの年番が回って来まして、それと一緒に何年何月の『当番』という帳面が回って来たのですが、その中には山車の購入や寄付の状況が書いてあったような覚えがあります。次の年番が回って来た時にはその帳面が無かったですね。」と語っておりますので、当然山車に関する記録類も当初はあったと思われます。

さらに山車の購入した直後については、しばらくは田辺久雄氏（屋号：中宿）宅の前にあった消防小屋の前に置かれ、その後すぐに成就院の土地を借用し、山車小屋を作り保管されたようです。

2. 購入後の補修と改修

新しく購入した山車を曳いて、初めての岩走神社例大祭を迎えた上宿の人達の喜びは一人のものがあつたと推察されます。以来山車については毎年のように入念に管理をして来ましたが、その改修過程等を関係者の記憶等を基にして概略的に振り返ってみることに致しましょう。

購入直後の大正期の事ですが、山車自身相当塗装等がはがれていたと推定され、すぐに全面的に漆塗装を施したとのこと。

八王子八木町では、売却直前に楽屋と囃子舞台の境の上部にあった欄間をはずし、新しい山車に入れ替えたと言われている。この部分は故宮野林蔵が製作したとのこと。（中仕切り欄間：「若葉」金箔押し）

また、人形については譲ってもらえなかった関係から、一本柱を上げない方式に改修して、唐破風板を付設する工事を同じく宮野林蔵が担当しました。しかし屋根の一部には一本柱を掲げた当時の遺構がしっかり残されており、

昭和に入って年代ははっきりしませんが、山車の屋根を改修することとなりました。当時の屋根は赤い厚手の布地で、さらに雨が降ってきますと、木綿の厚く織ったものを油で滲ませた茶褐色のシート（カップと言う）をかぶせましたが、それでも雨が漏ったりしたために、故内山勇三が亜鉛鉄板で板金工事を担当して、雨天の際にも支障のない山車としました。

昭和20年（太平洋戦争後）以降では、楽屋の側面（胴羽目の部分）の立格子の障子の部分を昭和25～26年頃、松村重蔵氏が補修を担当しました。その後山車の老朽化が進み軋んだために、従来は引き違いになっていたものを、昭和51年9月に、はめ殺し方式に変更し、宮澤伝次氏によって新規に製作されました。

昭和33年、隣接の新宿が山車の輪を新規に作り直したのに伴って、山車そのものが全体的に高くなったことから、“すりあい”（山車同士が近づき囃子の競演をすること）等も上宿の山車では低くてやりにくいとの理由で、昭和34～35年頃台輪の下の方輪棒で通称「かぶと」をもう一本追加して、山車の全体を高くする改修工事をしています。

昭和48年神輿も山車も相当老朽化が進んだため、「伊奈上宿子供神輿山車修理委員会」を結成して、（委員長 高水寛吉）4月頃から入梅の時期にかけて、山車の洗浄からキズを埋めて漆を塗る作業を五日市町田中塗装店（田中勲氏）に依頼しています。

同年8月15日には全てが完了し、同日田中勲氏にたいして委員会から感謝状を出しています。

昭和49年、50年と二度にわたって、八王子市上八日町の祭礼に山車と一緒に参加したことがありますが、この際屋根に数人が登ったために、垂木に損傷をおこして、昭和50年の8月下旬から9月初旬にかけて補修しています。

昭和51年9月には、山車の心棒の入れ替えを故中村忠次の指導のもとで実施しています。この時は泰和製作所において、輪の輪金の入れ替え作業も併せて実施しています。この時一緒に参加していた野崎高吉氏は「藁で輪金を燃やし、適当に伸びたところで、水に浸した雑巾等を使いながら鉄の収縮を利用して輪にはめ込む作業をし

ました。これは永年の経験と勘を生かした作業ですので、今後こういう技術者がいなくなってしまうのではないかと述べていました。

心棒の座金はそれまでは鋳物でありましたので、当時新宿に在住していた下山正男氏（矢代製作所）に錬鉄を削り貫いてもらい、各輪とも内側は釜に固定し、外側は固定しない方法で別々に設置したとの事です。

昭和53年9月には、野崎高吉氏は、山車の欄間があまりにもすいていて寂しいとのことで、手製の欄間を4枚寄贈しています。（雲海と命名する）「この欄間については私が渡米した折り、太平洋上で見たすばらしい入道雲に感激してデザインしたものです。但し将来正式のものが入る時までの間に合わせと考えております。」と述べられていました。

3. 山車の構造と仕様

それではこれから山車の構造や細部の仕様について、五日市町教育委員会が調査した『五日市町伊奈上宿山車調査報告書』（平成4年11月）を参照しながら考察をしてみよう。

はじめに屋根の形式としては、単層の唐破風形式で、後部から中央にかけて棟の部分に間隙を設け、その間に後部から人形をつけた一本柱（盛留とも言う）を立ちあげていく、後建て方式の人形山車です。

構造的なことを概略的に述べてみますと、

①梁間1間（柱真々143cm）、桁行2間（柱真々で、266cm）

造りで、前部に囃子舞台（囃子台とか囃子座ともいう）後部に楽屋を持つ二間構成の山車です。

②台輪：車輪の上に乗る台枠の総称。

台輪幅230cm、奥行326.5cm「鯉に波」の彫刻（白木彫り、眼には金色）を施し、四隅は前部は波、後部は若葉の象鼻を組み込んでいます。

③棟高：棟木の上部までの高さを示す。392cm

④軒高：軒の上部野地板までを示す。352cm

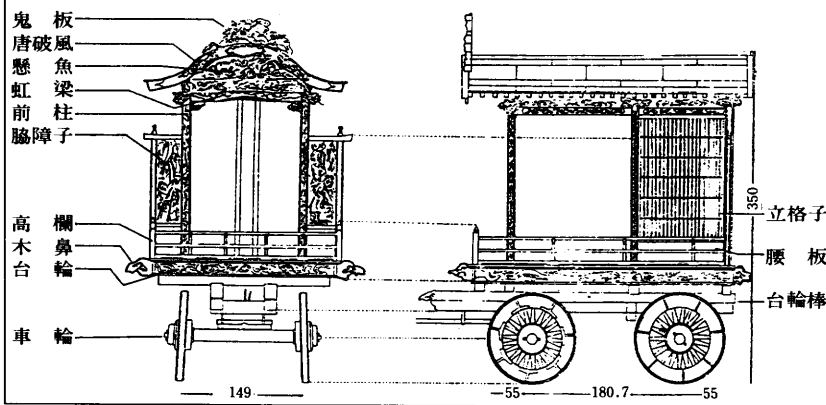
⑤台輪高：地面から台輪の床までの高さを示す。149.5cm

さらに各部についてそれぞれながめてみますと、下記ようになります。

⑥車輪：檜製、前輪は八王子で購入した当時のもので、御所車形式、後輪は伊奈で老朽化したため製作。山車形式、前輪後輪とも半径55cm、前輪と後輪の間隔180cm、車巾149cm

⑦梶部：前梶自在方式、前輪車軸部に鉄製の円盤2枚重ねの据輪構造を採用しています。

山車の名称 山車の図面は『五日市町伊奈上宿山車調査報告書』より転載した。



王子市（4本：江戸末期～明治前期）の他、五日市町近郊では、日の出町平井（1本：江戸後期）、羽村市（1本：江戸後期）、瑞穂町（2本：明治初期）、昭島市拝島（3本：江戸末期～明治前期）、青梅市成木（1本：明治前期）に同じ形式の山車が現存しています。

東京都以外では、神奈川県の津久井町（1本：中野、明治前期）、相模湖町（2本：小原、千木良、明治前期）や、さらに埼玉県所沢

- ⑧前 柱：囃子舞台の正面2本の柱の総称。
昇龍、降龍の平彫りを施す。几帳面取り。
- ⑨虹 梁：正面水引虹梁は若草である。
(二重虹梁) 側面は頭貫は七宝繫文。
- ⑩中 備：水引虹梁の上の組み込まれる物を示す。花鳥。
- ⑪琵琶 板：虹梁（上部）と軒の間、琵琶の形に似ているところから呼称している。翁と童子。
- ⑫懸 魚：破風の拝み下の部分の彫刻を示す。浦島。
- ⑬鬼 板：屋根の破風の上についており、装飾的な板。牡丹に唐獅子。
- ⑭胴 羽 目：当初は引き違いの障子、その後山車の老朽化と合わせてはめ殺し(立格子)に改修する。
- ⑮中 仕 切：前部の囃子舞台と後部の仕切りを示す。
欄間は若葉、金箔押し。(ただし後補のものである)
- ⑯脇 障 子：楽屋側面後部の所に付く。鏡板とも称し、山車の中では代表的な彫刻が施される。
左右とも水龍、龍の頭部付近で岩に当たった水は激しく分かれて力強さを示す。裏面には波を配す。
- ⑰高 欄：台輪上の正面と左右の三面に擬宝珠高欄を巡らせている。(朱色)
- ⑱屋 根：亜鉛鉄板平葺、障子張り3枚並列、24本の化粧垂木で構成されている。
- ⑲持ち送り：上部の部材を支えるもの。
虹梁持ち送り、亀に波(浪)の彫刻を配す。
桁持ち送り、鶴に松、牡丹を配す。

山車の数え方については、通常は一台とは数えず、前述の「鉾」などに譬えて一本と称しています。
またこの一本柱構造の人形山車については、現在の八

市などにも現存しています。

おわりに

山車については、仏像のように本堂等でずっと鎮座しているものと異なり、常に祭礼時には動いて来たわけですから、部材の消耗も激しく、時には補修したり、場合によっては改修したりしながら現在に至っています。しかしいずれの山車においても、地域の人々に親しまれ、愛用されてきました。時には多額な費用を捻出して補修や改修がされてきました。

上宿の山車については、明治17年起工、同20年完成したと言伝えられていますので、製作されてから既に106年経過したことになります。上宿で購入してからでも、早いもので70有余年経過したことになるわけです。

上宿で愛用され、上宿の人々と一緒になって祭礼を支えてきた山車ですが、時代の要請や地区の人々の要望から、本来の形式を変更した時もありました。しかしそれだけに人間味のある、上宿の人々と一緒に生きてきた山車ということが言えると思います。

補修技術の伝承等が困難になりつつある今日、一つの地域の中で保存していくことは一層難しくなっていくと思われませんが、地域の誇りとして、また長い間山車という文化遺産を所有してきた、という自負心や情熱を持って、今後も一層大切に見守ってほしいと思っています。それが自分達の地域を見直すことになりすし、地域を愛することにも繋がっていくと思うからです。

[付 記]

以上述べてきました山車の他に、上宿では江戸時代後期から末期に製作されたと推定される山車があったようです。その一部分の組み物を野崎高吉氏は所有しております。